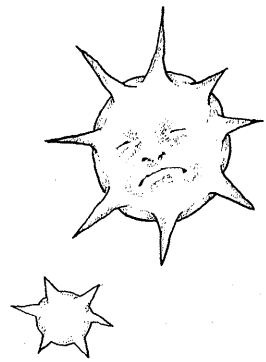


特集へこだわるへ

こだわりと情緒



藤原 正彦

数学者には、こだわる人が多いですね。数学の世界は知恵比べのようなもので、わからない問題を誰が一番に解けるかと、世界中の数学者が考えています。何年もかけて、寝ても覚めても、風呂の中でも、電車の中でも、歩きながらも、どこでも考え続ける。そうしないと解けないのです。ずーっとこだわり続ける。食卓についても、何を食べているのか解らなくなる程こだわって、最後は、頭脳ではなく、もうほとんど念力で解くようなのです。独創は、こだわらないことには生まれてこない。異常なこだわりです。最近の学

生は、こだわりがなくなってきた。これは憂慮すべき事と思います。

こだわるには、こだわるだけの動機が必要で、例えば、数学の研究というのは、山の頂きにある、美しい花をとりに行くようなものなのです。その花をとろうと必死でこだわる訳です。動機として、まず、その花の美しさに感動しなくてはいけない。感動すればする程、力が出てきて、千尋の谷に行手を阻まれても、熊が出て逃げ帰っても、無限の樹海に踏み込んでも、つまり、何度挫折に会っても挑戦し続ける事ができる。感動する心——情緒——に支えられて挑めるのです。研究は、失敗するのが当たり前、それでも、こだわり続ける事ができるのは、知識や、頭の良さではなく、情緒、例えば、美しいものに感動する力が強いかどうか、というようなことです。数学は頭の良さだと思われていますが違います。IQ 200を越えている人でも数学者になれるとは限らないが、IQ 138で天才数学者もいる。この天才数学者は、ある夜、勉強していたら美しい数学の定理を見て、感動して涙を流すというような、感動力の持ち主です。

情緒をどのように育てるか、これはとても大きな問題で難しい事ですね。今の世界中の教育論の誤りは「良い事の積み重ねは良い事」という事でしょう。卑近な例ですが、三歳で、ピアノを習う事、音に慣れるし絶対音感もつくし、これは良い事です。三歳でヴァイオリン、これも良い事。三歳で水泳、これも、泳ぎを覚えるには良い事。三歳で英語、これも良い発音になるし良い事です。しかし、全部やってしまうと、子どもは将来、伸びな



こだわりの方向が大切ですね。例えば、乞食が、おなかすいて、死にそうになり、パンを盗んだ。それをみていたAは、「日本は法治国家である。彼の窃盗行為は法律を犯しているので、警察へ通報しよう」、Bは、「彼はパンを盗まないと死んでいた。人間の命は一片の法律よりも重い。だから見て見ぬふりをしよう」と考えた。AかBか？ 出発点でどちらを選ぶかで方向は全く違う。この判断の元になるのが情緒力なのです。情緒力が育っていないと、こだわる方向がままなりません。何も見えない暗い海にのり出した船に喩えると、情緒は、船頭の方向感覚です。論理的思考力は、船頭の腕力。知識は、しっかりとした船体です。情緒、論理的思考力、知識、どれが欠けても、船は進まないのです。今の日本では、知識は過剰な程、論理的思考力は、それ程でもないが、まあまああるでしょう。そしてこの二つは、誰もが強調している。が、しかし、方向を決めるべき情緒の大切さが言われていない。だから、「こだわると怖い」という迷信が生まれるのでしょう。変にこだわるとヒットラーになってしまいますからね。彼は非常に頭のいい人でしたから、ユダヤ人は虐殺すべきというこだわりの論理の筋は通っていたけれども、情緒がおかしいから方向がおかしくなっていくのです。こだわりと、こだわりの方向を決める情緒を一对にして、きっちり育てる事が重要です。なつかしさ、不幸な人に対する敏感さ、美しいものに感動する力、勇氣、愛国心、正義感…など、高度な情緒を育てておこなくてはなりません。夕焼けや林の間から見上げる青空の美しさを共に感じたり、障害を持った子を手助けする大人の姿を示したり、情緒を育む努力をします。自然には出て

